用心棒日月抄

凶刃

藤沢周平

新潮社

用心棒日月抄

凶刃

藤沢周平

新潮社

凶刃（きょうじん）
用心棒日月抄（ようじんぼうじつげつしょう）

平成三年八月十五日　印刷
平成三年八月二十日　発行

著者　藤沢周平（ふじさわしゅうへい）

発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業（〇三）三二六六－五一一一
編集（〇三）三二六六－五四一一
振替東京四－八〇八番
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Shuhei Fujisawa 1991, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-329608-9 C0093

凶刃

用心棒日月抄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

「ただいま申したような仔細によって、組を解いて名簿を大目付にわたす。むろん、名簿は大目付の手もとに固く秘匿されて世に現われることはない約定だが、その日を以て嗅足の組はお役目を終ることと相成る。ただし……」

と言って、正面に坐っている男は自分の前にならんでいる十二名の武士を、右から左にじろりと見わたした。

場所は城下丑寅（北東）のはずれにある般若寺の本堂で、時刻はおよそ四ツ（午後十時）過ぎだろう。二月に入って旬日が過ぎたというのに、夜気はまだしんしんと冷えるが、深夜の寺にあつまっている男たちは身じろぎもせず、顔を前にむけて男の言うことを聞いていた。ただし、と正面の男はもう一度言った。

「もし藩主家に異変あるときは、大目付の密命にしたがってただちに従前のお役目に復帰することになる。ま、そういうことにならぬよう、藩主家のためにも祈ろうか」

ここまで申したことについて、疑念あるいは異存があれば聞こう、と男は言った。鬢の毛が白

く顔色は青白いが、面長の面上に威厳がただよう中年のその男は榊原造酒。家禄三百石の奏者番が表向きの役だが、実際はその役を勤めることは稀で、もっぱら加役の寺社奉行として知られる家の当主だった。

榊原は、自分の前に横一列にならんだ男たちが一語も発しないのを見ると、軽くうなずいて言葉をつづけた。

「嗅足は、もと旗本の第二組。藩草創から数えてざっと百五十年、藩主家ならびにわが藩を陰からささえて参った。その名誉ある組をわれらが代において解くことは、情においてしのびないところがあるが、時勢の流れ、ましてや殿ご自身の思し召しとあれば、これまたやむを得ないことである。長い間ごくろうであった」

「大目付どのに名簿がわたるのは、いつごろに相成りますか」

そう聞いたのは色の黒い、丸顔の男だった。榊原はその男をじろりと見た。

「近々と申しておこう」

「江戸の組も同様に解かれることになりましょうや」

「むろんだ。江戸には人を選んでさしむけ、解散を説かせるつもりでおる。ほかには？」

だが質問はそれだけだった。男たちはもとの無表情にもどった。男たちは必ずしも榊原を注視していなかった。無表情に前を向いていた。一基の燭台だけが照らす男たちの顔は、表情を殺しているためか、どの顔も同じように見えた。

「なお、二の組には後日改めて申し聞かせるゆえ、さように心得られよ。では、別れの盃の儀を、古式を以て行なう」

榊原が言って手を二つ打つと、本堂の隅の襖がひらいて、そこからあきらかに足軽身分と思わ

れる身なりの、しかもかなりの年配の男が三人、重ねた白木の膳と酒と盃をささげて現われた。
三人の男は齢を感じさせないきびきびした動きで、榊原と十二人の男の前に膳を配り、素焼きの盃に、素焼きの酒壺から酒をついで回った。
では、と言って榊原が盃を掲げると、男たちも一斉に盃を掲げた。榊原が大声に言った。
「あら、めでたやな、戦は勝ちてやみにけれ……」
「戦は勝ちてやみにけれ……」
と男たちが唱和した。
「葦をば焼きて国に帰らん」
葦をば焼きて国に帰らんと男たちも唱和し、終るとともに盃をあけた。そしてつぎに、右脇に置いていた太刀を左手につかみ上げると、一斉にやあ、と叫んで酒を干し終った土器をはっしと刀の鍔に叩きつけ、割った。
それが済むと、十二人の男たちは一礼し、立って黙々と本堂の入口にむかった。そして扉の内側で一斉に懐から頭巾を出して顔を包むと、大きな獣でも抜け出すように、足音も立てず一人ずつ姿を消した。最後に本堂の扉がぎいと音を立てて外からしまった。
その様子を見とどけると、袴を払って榊原造酒も立ち上がり、庫裡にむかった。

「では、面倒をかけるがよしなにたのみいる」
渋谷甚之丞はそう言って膝を起こしかけたが、ふと物を思い出したという顔色になって、膝を畳にもどした。
「時に、牧の病気のことで近ごろ何か耳にしておるかな」

「いや、いっこうに」
と青江又八郎は答えた。剣友の牧与之助が持病の労咳が重くなって床についた、と聞いてから二月近くなるが、その後のことは知らなかった。
「一度見舞わねばならんと思っているが、なにせ暇がない。気持だけで、さっぱりその機会がない」
「いや、そのことだが……」
と言って、渋谷は口ごもった。そして、ちょっと首をひねってから言葉をつづけた。
「事実かどうか知らんが、じつは異なことを耳にした。牧は人が見舞いに行っても、謝して決して会わぬそうだ」
「ほほう」
又八郎は目を細めて渋谷の日焼けして黒い顔を見た。痛ましい話を聞いたようで、胸がさわいだ。
「人にも会いたくないほどに、身体が弱ってしまったのか」
「そうだろうという者もいるが、単に牧は痩せた顔を人に見られたくないのだという者もおる」
「そう言えば、年賀の席で出会ったときは、もはやかなり窶れておったな」
「多年の労咳が、いよいよ表に出て来たのだろう」
と渋谷が言い、二人はしばらく暗然と目を見かわした。
だがすぐに渋谷が、や、思わず長居して迷惑をかけたと言って、今度はすぐに席を立った。又八郎が渋谷を見送りながら玄関まで出ると、そこに待っていた渋谷の家の下僕が、跪いて履物を直し、土間におりる主人の足もとを提灯で照らした。

気配をさとって外から見送りに出て来た青江家の下僕藤助にみちびかれて、渋谷主従が門を出て行くのを、又八郎は玄関の内から見送った。渋谷の太い首、盛り上がった肩が黒い影絵になって見えた。

――甚之丞も……。

むかしのようには剣も使えまいて、と又八郎は思った。外歩きの多い郡奉行にしては無用の肉がつきすぎておる、と思ったのだが、それは自分自身のことでもあった。時どき庭におりて木刀を振ることこそ忘れないものの、時にはその木刀さえ重く感じるほどに、近ごろ肩にも腹にも贅肉が盈ちていることを思い返して、又八郎はかすかな後悔に似た気持が胸を横切るのを感じた。

――わしと甚之丞は太り過ぎ……。

そして牧与之助は痩せすぎたか、と考えたが、むろんそれは洒落にもならない感想だった。かつての剣の三羽烏も、齢喰っては形なしだなと思いながら、むっつりした顔で部屋にもどると、その顔色を気にしたのか、茶菓の跡を片づけていた妻の由亀が手をとめた。

「渋谷さまは、何か格別のご用でも」

と由亀は言った。女子は来客の前に出ないしきたりなので、由亀は渋谷と夫の話を聞いていなかった。

由亀はあと二、三年で四十になるが、色白でほっそりと痩せている。若いころはむしろ肉づきのよい娘だったのだが、又八郎の妻となって三人目の子を生んだあとは、ほっそりと肉が落ちてそのまま太らなかった。

「いや、大したことではない」

又八郎は妻の懸念を察して、心配はいらぬという身振りを示した。

「あれの総領が、藩命で江戸の学塾に学んでおる。雄之助というのだが、その息子に金をとどけてくれという頼みだ」
「おや、それがそうですか」
由亀は床の間を振りむいた。そこにさほどかさのない油紙の包みが載っている。又八郎は藩命で、月が変ると出府することになっていた。在府の期間はおよそ半年と指示されている。
「それだ。渋谷も人の親、わしにはとんと似ぬ伜だなどと言っておったが、遠くの息子が案じられてならんのだろうて」
「藩の学問所でも秀才でいらしたそうですね、その子は」
由亀は言ってから、思案するように首を傾けた。
「うちの松三郎は、どのようになりますやら」
「まだわかるものか」
と又八郎は言った。
「いまは、やりたいことをやらせておけばよい」
三人の子は上二人が女子で、下が男子。青江家の跡取りになる松三郎はまだ十歳だった。城下の学塾に通い、また杉村という一刀流の道場にも通いはじめているが、本人の得手、不得手がはっきりするのは、まだ先のことだろうと又八郎は思っていた。
「でも、松三郎を見ておりますと……」
と由亀が言いかけたとき、玄関に人がおとずれた気配がし、やりとりの声につづいて客間に近づくひそやかな足音がした。襖の外から、旦那さまと声をかけて来たのは藤助である。
又八郎があけていいぞと言うと、藤助は襖をあけ、廊下に膝頭をそろえた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「榊原さまのお屋敷から、お使いがみえてございますが……」
「寺社奉行の榊原さまだな？」
「はい」
「用件は？」
「夜分おそくて申しわけないがというおことわりつきで、これからお屋敷までご足労ねがいたいというご口上でございます」

二

季節は間もなく三月になろうというのに、深夜の町を包む夜気はつめたかった。城の濠ばたの桜の蕾は日々ふくらんで来ているが、この分では花が咲くのはまだ先だろう、と又八郎は思った。

空は曇りで、まっくらな夜だった。先に立つ藤助が持つ提灯のあかりに、歩いて行く二人の足が、踊るような影を地面に落とすだけで、ほかには人はおろか、犬一匹の気配すらない夜道だった。

――寺社奉行が、何の用か。

と、また又八郎は思った。いくら考えても、何の心あたりもなかった。

勤めの上の話でもあるか、と思ってみた。又八郎はいま近習頭取という役職についている。その役料三十石をふくめて、百六十石の禄を喰んでいる。しかし寺社奉行という職掌は、又八郎の勤めからはもっとも遠い部署で、奉行の榊原造酒が勤めの上の話で深夜呼び出しをかけるような用件があるとは思えなかった。

そうかといって、榊原奉行本人と個人的な面識があるわけではなかった。城内で出会えば、累代領内の寺社のことを扱って来た、古く特殊な家柄に敬意を表して、ねんごろに挨拶はするものの、血色のわるい顔をした榊原に出会うのは、年に二、三回といったものだろう。

「旦那さま、着きましてございます」

藤助の声に顔を上げると、榊原家の門前だった。三百石の奏者番兼寺社奉行の屋敷にしては、大きすぎる門構えが濃い闇の中にそびえていた。又八郎は考えごとを放棄して、潜り戸を入った。門にも玄関にも灯はなく、暗い家に思われたが、藤助が声を張って訪いを入れると、すぐに手燭を持った人が現われて、又八郎と供の藤助をそれぞれの場所に案内した。

はたして家の中も、洩れて来る灯のいろひとつなく暗かったが、みちびかれて入った奥の部屋には、大きな丸行燈がまぶしいほどの光を撒きちらしていた。そしてその灯の下で、小机にむかって書きものをしていた男が、筆をおいて又八郎を見た。屋敷のあるじ、榊原造酒だった。

「や、夜分にお呼び立てして恐縮……」

榊原は気さくに言って立って来ると、又八郎に坐るようにすすめ、自分もむかい合って坐った。挨拶をかわしたあと、榊原は案内の家士が茶をすすめて去るまで黙然と口をつぐんでいたが、家士の足音が聞こえなくなると、ようやく口をひらいた。

「寺社奉行が何の用かと、さぞ当惑されたろう」

榊原は言って、顔にかすかな笑いをうかべた。

「はあ、たしかに」

「ごもっとも」

と榊原は言った。そしてひと息ついてからつづけた。

「月が変ると、江戸に参るそうだの」
「そうです」
「いつごろ、出国される？」
「御沙汰では三月半ばとなっておりますが、それがしの出府は病気療養の小塚どのと交代するということで、小塚どのの帰国の時期によって、多少の日にちのずれが出るかと思います」
小塚助左衛門は、江戸屋敷に二人いる近習頭取の一人だが、去年の暮あたりから持病の腰痛が悪化し、勤めもままならない有様になったので病気療養のため一時帰国の許しが出た。そのため、小塚は帰国して腰痛にすぐれた効き目があると言われる温泉どころ、領内の鳥越の湯宿で加療することになり、かわりに国元の近習頭取の中から、又八郎が選ばれて出府することになったのである。
小塚助左衛門が、病身にもかかわらず国詰の許しを得られないのは江戸屋敷奥の御用人職を兼務しているためで、およそ半年の加療で病気が快方にむかえば、また江戸詰に復帰することになる。又八郎の江戸詰がおよそ半年と内示されているのはそのためだが、ただし又八郎は奥の御用人まで兼務するわけではない。
そういう事情のあらましを、又八郎は榊原に話した。榊原の話というものが、どうやら自分の出府に関係するらしいとさとったからである。
はたして、榊原はじっと耳を傾けた。そして又八郎の話が終るとすぐに言った。
「半年か。ちょうどよい」
「……」
「じつは、ごく内密の頼みがある」

言うと、榊原は又八郎の目をひたとのぞきこむようにした。寺社奉行の青白い顔が急に表情を失ない、二つの目だけがこちらの気配を窺っているような、奇妙な感触を又八郎は受けた。
「何ごとでしょうか」
「嗅足組について、そこもとはあらましのことを承知しているはずだ。さようだな」
「……」
又八郎は無言で榊原を見返した。組について知るところは、他言無用と、先年病死したさきの家老にして組の頭だった谷口権七郎に固く釘をさされている。めったなことは言えなかった。
すると、その顔色を読んだらしい榊原が、すぐに言った。
「いやいや、ここでは何を言おうと懸念はいらぬ。わしがすなわち組の頭領。先年谷口どのより、この役を引き継いだのだ」
あっと又八郎は榊原を見た。思いがけないことを聞いた気がしたが、しかしそういう目で見れば、榊原造酒はいかにも陰の組の頭に似つかわしい人物のようでもあった。
「そこでもう一度聞くが、組のあらましは谷口どのから耳にしておるな」
「ごくあらましのことにござる」
慎重に又八郎は言った。
「たとえば組の人々についてはほとんど何も聞いておりません」
「しかし、江戸の組の者とは、多少のつき合いがあったはずだ」
と榊原は言った。江戸屋敷の女嗅足、佐知たちのことを言っているのだと又八郎は思った。不意打ちに、頬がほてって来るのを感じたが、どうにかこらえた。榊原は佐知と自分とのつき合いについて、どのあたりまで知っているのだろうかと思った。

しかし榊原は、又八郎の動揺に気づいていて知らぬふりを装うのか、それともまったく気づいていないのか淡々とつづけた。
「さて、そこでおてまえに秘事を打ち明けねばならんのだが、言うまでもなくこれから申すことは他言無用となされたい。よろしいか」
「承知してござる」
「このたびにわかに嗅足組を解散し、身柄を大目付に預けることと相成った」
唐突に榊原は言った。そして、多分又八郎の顔にうかんだ驚愕のいろを読んだのだろう、言いわけがましい口調でつづけた。
「もとよりわれら組の者の意思ではないが、殿のご命令ゆえ、いかんともしがたい」
「殿が組を解けと申されるからには、何か理由でも？」
「理由はある」
と榊原は言い、去年の秋に城下で旅の者が横死し、その死骸が二日ほどして消失するという事件があったのを知っているかと言った。又八郎はうなずいた。
それは城下で一時大きな評判になった事件だった。城の北濠のそばで、刀による深手を負って絶命している町人姿の旅の者が発見され、町奉行の手の者によって般若寺にはこばれた。一方城下の宿屋を虱つぶしに調べた結果、その男は甚内町の結城屋に泊っていた二人の江戸者のうちの一人と判明したが、もう一人の行方は知れなかった。
奉行所では、商用で城下をおとずれた二人が、商いの上のことで争いを生じ、一人がもう一人を殺害して逃げ去ったのではないかという推論をくだしたが、宿帳に記されている身元をたしかめることが必要だとしても、死骸をそのままにはしておけなかった。般若寺の和尚に供養しても

らって、寺内に仮埋葬することにした。
　ところが、その死骸は一夜にして忽然と寺の本堂から消え失せてしまったのである。明日は仮埋葬しようとしていた寺も、立ち会うはずだった奉行所の同心たちも、唖然として顔を見合わせるだけだった。
「まあ大体はそういう話になっているわけだが、事実は異る」
　と榊原は言った。
「結城屋に泊っていた二人の商人は、将軍家から遣わされた隠密で、数日領内できわめて不審な挙動を示した二人を追いつめて処分したのは、わが組の者だ。一人は殺害したが、一人は逃げられたという報告がわしにとどいた」
「不審な挙動と申しますと？」
「二人の者は行商人で、城下から領内の村々まで小間物と錦袋円（きんたいえん）という江戸上野池の端の高名な薬を売り歩き、小間物はともかく薬はよく売れておったそうだ」
「……」
「ところがこの二人、はじめは神妙に商いをしておったが、やがて村を回っては山の名を確かめ川の幅をはかり、ひそかに図面らしきものをつくりはじめた。城下でも、めったに人も歩かぬような小路まで出入りし、城の濠幅などをさぐったりした形跡がある」
「ははあ」
「しかし、ま、ここまでは挙動不審と申しても実害はない。ところが、ある朝蔵番が城の戌亥（いぬい）（北西）にある武器蔵が破られた跡があるのに気づいた。こっちが手出しせぬとみて図に乗ったのだろう。そこで急遽（きゅうきょ）、兵粮蔵（ひょうろう）、城下はずれ曾根村の焔硝蔵といった要所にわが組の者を配った

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com